

河合悦三著

『農業と農民はどうなるか』

千葉燎郎

私は、本誌第一六卷四号（昭和三七年一〇月刊）で佐伯尚美氏の著書『現代日本農業の解明』の書評をこころみた。そのさい、現代日本農業の解明にあたっては、農業基本法を中心とする現代農政の浸透が、農業の内部構造にどのような変化をもたらした、ことに農民の主体性にどのような作用をおよぼしつつあるか、それを明らかにすることが必須の課題であることをのべ、同書がその点ではやや欠けるところのあることを指摘した。

佐伯氏の著書にたいするみぎのような私の不満は、そのころちやうど発行された河合悦三氏の『農業と農民はどうなるか』

書評 河合悦三著『農業と農民はどうなるか』

（昭和三七年七月刊）を一読して、かなり満たされる思いがした。河合氏の著書では、最近の農業と農民のうごきが、農村の現実にくまなく描きだされており、またそれが、近年の日本経済の高度成長の動向や、農業基本法・農業構造改善事業など一連の農政の進捗と、どのように結びついているかという点も、そうとう具体的に明らかにされている。こうした本書のすぐれた具体性は、全日本農民組合（全日農）中央常任委員である著者が、農民運動の実践のなかでとらえた成果として、高く評価できるだろう。

まず、本書の目次をあげてみると、Ⅰはじめに、Ⅱ農村における新しい波、Ⅲ農民層の分解、Ⅳ農業基本法の狙い、Ⅴ農業構造の改善、Ⅵ共同化——共同経営の役割、Ⅶ農民の動き、Ⅷこれからの農業と農民（Ⅰ曲り角Ⅱ自由経済か計画経済か、Ⅱ農民はどうしたらよいか）、といった内容になっている。これでもわかるように、本書は、現代日本農業の基本的なうごきをつくつかの側面にわたって考察し、当面する農業の基本問題についての著者の見解を述べたものである。ただ、新書版二一六頁というかぎられた紙数のなかで、これだけの内容をよりあげようとしたため、個々の問題については論究がすこし不充分で、舌たらずに終わっているところが多いのは惜しまれる。もうすこし問題をしばったうえで、つっこんだ論究をしてほしかったと

という気がする。

とはいいいながら、上述のように、本書は、現代日本農業の基本的なうごきと基本的な問題について、ひじょうに具体的に理解させてくれるし、また示唆にとんだ著者の見解は、多くのものを教えてくれる。なかでも、私にとって興味深かったのは、著者の農民層分解論と、それにもとづく農業共同化論だったが、社会党をふくむ共同化推進論にたいする本書の批判は、農業構造改善事業にたいする批判とともに、本書の重要な指摘だといえよう。

これらの批判をふくめて、河合氏の見解の多くの部分は、私自身の現代日本農業にたいする基本的な理解から、ほぼ同意できるように思われるが、ただ、本書で河合氏が、日本農業の当面する「曲り角」を、「根本的には、自由経済か計画経済か」ということだ（本書三頁）といっておられる点については、どうも疑問がのこる。しかも、この点が、本書にとってむしろ基本的な視点とさえいえるところだけに、これにたいする疑問はほおっておくわけにいかない。以下に、私の疑問を批判的に述べて、著者の教えを乞うことにしたい。

二

まずはじめに、著者のいうところを、私なりの理解にしたが

つてとりまとめてみよう。それは、「農業も自由から計画への「曲り角」（本書はしがき）という言葉に要約されるように、現代は「経済そのものが自由経済から計画経済へ曲らざるをえなくなっている」（同「一八八頁」）時代なのだから、農業が曲る方向もおのずから明らかであり、農民が自由経済と計画経済のいずれの道をえらぶべきか、もちろんはつきりしている、ということのようである。そこで、問題になるのは、この自由経済と計画経済という言葉が何を意味しているかであるが、それは原則的には小商品経済ないしは資本主義経済と社会主義経済とをさしているようである。たとえば「自由経済がすぐれているのだと主張している資本家たちが、社会主義の真似をして××計画というような経済計画をたてざるを得なくなっている」（「一八五頁」）が、「資本主義××計画化」が社会主義的計画経済と本質的にちがうこと（「一八七頁」）、「計画経済は社会主義の下でこそ可能であるということ」を指摘しておかねばなりません」（「一九二頁」）としているのは、それを示している。つまり、著者が「これからの農業が自由経済から計画経済への曲り角にある」（「一八八頁」）という意味は、つぎのようなことなのである。

「農業基本法がでてからとくに農業の企業化、農業の近代化という言葉がはやり、もうかる農業ということがた

われ、国内ではもとより国際的にも自由競争に勝つ農業にならねばならぬということが強調されて」いる。「資本主義を認めるかぎり、自由競争に勝つためには近代化しなければならぬことも不可避」だろう。しかし、「農業の資本主義的近代化は当然に農民の大多数に離農、農産物価格の引下げ、労働強化などをもたらすから、大多数の農民としては、*『近代化』* 反対を叫ばざるをえないことは明白」で、「資本主義を認めていながら、農民の犠牲なくして農業の近代化ができるようなことをいうのは、農民をギマンするもの」といえるし、同時に、「資本主義をそのままにしておいて、農民を保護しようというのもまた農民に幻想をいだかせるもので誤り」である。

そこで問題は、「一般にわが国農業の発達は、当面、その資本主義化ないしは経営の高度化であることは、経済学上や歴史学上の常識であるといわれて」いるが、「はたして日本の農業は資本主義を経なければならぬものか」どうか、ということである。

たとえば、「ソ連では以前おくれっていたおおくの民族が資本主義的な発展段階をとらないで、社会主義へ到達したし、『モンゴルは封建制から社会主義への移行において、資本主義の段階をとりこえ』てしまった。『現代は資本主

義から社会主義への移行の時代』であり、また『国家独占資本主義は、社会主義のもっとも完全な物質的準備』なのだから、『日本の農業が資本主義を経ないで社会主義へ進むことができる客観的条件が国際的にも、国内的にも存在することは明白』だといえる。それだからこそ、『農業問題を社会主義への展望のなかで位置づけることがきわめて大切である』といわれ、*『零細農耕制の根本的解決の唯一の道……耕作者の生活改善のための唯一のたらしい道は、集団経営の道であり、協同組合と社会主義の道である』*といわれるのである。（以上一八八—一九一頁）

そこで、「農民にとって今一番必要で大切なことは未来はプロレタリアであることを自覚すること」であり、また「現在も事実上の労働者であることを認識する必要」である。「ところが、これがきわめての難事で、……農民は経営者であり、企業家であるという宣伝がいき届いている上に、実際上も独立の小生産者—小商品生産者であり、形式上は労働者とかいへば経営者」で、「農地などの所有者であるということから、二つも二つもの性格をもち、時には労働者になり、時には経営者になり、時には地主的になる」ということになる。だが、こうした「形式を離れて事実上の農民の生活をよくみたら、事実上の労働者だといわ

ざるをえない」のであって、「米価要求をはじめとする農畜産物価格要求の根本要求が、生産費及所得補償であるということ」が、それを端的に示している。

かように、「農民は小ブルジョアではあるが、今日その労働者の性格が強められ、労働者ではないけれども、社会主義的な要求そのものをもつようになってきて」おり、「要するに、今日、日本の大多数の農民が社会主義を要求する理由はあつても反対する理由はない」のである。（以上一九三―一九九頁）

三

たしかに、著者のいうとおり、およそ「現代は資本主義から社会主義への移行の時代」という意味では、「経済そのものが自由経済から計画経済へ曲らざるをえなくなっている」とことは必然的だろう。そして、日本農業が当面している基本的な問題も、根本的にはこうした世界史の転型期のなかで生じているからには、そのような一般的命題をふくんでいることは否定できないし、むしろそうした展望のなかでとらえることを要請するものだろう。その点をはつきり指摘したことは、本書の重要な功績だといつていいかもしれない。

だが、ここで、さしあたり二つの疑問がおきる。ひとつは、

著者がなぜ「自由経済から計画経済へ」というような言葉をつかつて、「小商品経済ないしは資本主義経済から社会主義経済へ」という概念のはつきりした言葉をつかわないのか、という疑問である。いまひとつは、現代の日本農業が当面している「曲り角」というものを、このような世界史的な一般的過程としてだけとらえていいものだろうか、という疑問である。

まず、前者からのべよう。上述したように、著者のいおうとしていることは、今日の日本の小農民経済がぶつかっている矛盾を解決するには、もはや資本主義経済制度をとることなく、社会主義経済制度にすすむべきだし、それが可能な段階だということである。このことは議論の多い問題だろうが、さしあたりここで問題にするつもりはない。私が疑問なのは、そのことをいいあらわすのに、「自由経済から計画経済へ」というようないい方をしているのは、どういうものだろうかということである。

もちろん本書は普及的な書物だから、一般ジャーナリズムの自由競争論や農業企業化論のさわがしい混乱のなかから読者をみらびきだすために、とくにこうしたキャノンフレーズのような表現をつかったのかもしれない。また、その努力はあるていどまで成功していることも認められる。けれども、逆にこうした表現が、とくにつぎのような問題に関連して、すっきりしな

い疑問をのこすことも指摘しないわけにはいかない。

本書の「Ⅶ農民の動き」のところで、全日農の主張として、「農業の安定的発展のためには、価格補償、市場規制のほか生産の計画化ならびにそれにとまう経営の集団化が必要である」という意見があげられており（四七頁）、それは「生産性の向上、増産が価格の暴落をもたらし、骨折りの損のくたびれ儲けにならないように、全国的計画生産をおこなうという社会主義的農業建設の方向を指向しつつ広範な中小農を団結させ、このための基礎条件を一つ一つたかいたる運動をすすめて行く」という全日農の一九六一年度運動方針にもとづくものであることがのべられている（一四八頁）。著者が「自由経済から計画経済へ」と主張するときの計画経済のおもな内容は、この計画生産ということにあるようであるが、疑問は、こうした計画生産ということのとりあげ方である。

たとえば本書は、「農民が安心して増産するためには、政府による価格保障が契約栽培・飼育かということになります」として、契約栽培と価格保障の現状をのべ、現在の「価格保障制度が農民を安心して増産させるのに役立っていない」ことを指摘したあと、「農畜産物が、週期的に暴落暴騰することに対して、その差をばげしくする市場のしくみや仲買人の手数料、小売商などの利益を適正化することとともに、農民が計画的

に生産する必要が主張されています」とのべている（一六四～一六六頁）。これは、前記の全日農の主張をふえんしたものとみられるが、さらに同様の見解を「当面の要求」の一例として、つぎのようにのべている。

「生産費及所得を補償する価格保障制度の確立。これは農民の基本的な要求ですが、農民が好き勝手に生産したすべての農畜産物に、生産費及所得を補償することのできないことは明白でしょう。自由に生産したら需要に合致しないものができるし、生産費にも限度がないからです。それだからどうしても計画生産が必要になるのです。…経済的に考えれば、どんな農畜産物を生産しようと同一労働に同一報酬があれば文句はないはずです。資本主義社会での統制、生産制限が農民にとって嫌われるのは、麦の例でもわかるように、作付転換をすれば経済的に損になるからです。生産費及所得を補償するための計画生産なら、農民は喜んでやるはずでしょう。」（二〇六頁）

著者が「計画生産の必要」を説かれるのはいいとして、みぎのようなべ方だと、それが当面の要求、当面の課題なのか、そうではないのかという点が、どうもはっきりしないのである。著者はべつのところで、「計画栽培だけは農家の心がけでできるというもの」とか「需要に応じた生産計画は資本主義のもと

でも可能」とかいうように、資本主義の下でも計画経済が可能であるかのような幻想をいだいている農民もあるようですから」といって、「計画経済は社会主義の下でこそ可能である」ことをはっきり指摘している（一九一―一九二頁）くらいだから、計画生産が社会主義経済の課題であって、当面する資本主義経済下の課題にはなりえないことを、むしろ明確にしようとしてゐるはずである。それなのに、前記のように、当面の農民の要求とむすびつけて説かれてゐるのは、どういふものだろうか。みぎのような説かれ方では、当面おこなわれている農民の価格保障要求が、無意味であり誤りでさえあるかのような錯覚をおこしかねないのではなからうか。

じつは、この点は、昨年（三七年）九月の全日農第五回全国大会で、「計画生産と価格保障で豊作貧乏をなくそう」という中心スローガンをめぐるはげしい討議をまきおこした点で、たんに本書の著者の見解の問題という以上に、わが国の農民運動が当面する実践上の問題になつてゐるのである。このスローガンは、採決の結果少差で採択されたものの、今後の問題点としてのこるだらう。私は、計画生産が社会主義経済の課題である、という河合氏の指摘の立場をとるから、このスローガンが、当面の課題になりえないものをとりあげているとかがえるわけであるが、同時にまたこうしたとりあげ方は、計画生産

の条件である社会主義を実現するという問題を、かえつてあいまいにしてしまふのではないかと思う。

同様に、本書の計画生産のとりあげ方も、この批判があてはまるだらうと思うが、そうした点から、「自由経済から計画経済へ」という言葉であらわされてゐる本書の問題のつかみ方には、大きな疑問を感じるのである。そして、こうした問題のつかみ方は、おそらく著者の意に反して、「資本主義から社会主義へ」という現代のもっとも切実で重大な問題に接近する基本的な道を、かえつてぼやかしてしまうのではないかとかがえるが、どうだらうか。

四

第二の疑問にうつらう。第一の疑問は、第一の疑問がとらえたのと本質的には同じ問題を、ちょうど逆の角度からとらえたものといえるかもしれない。

日本農業が当面している「曲り角」について、それを「社会主義への展望のなかで位置づける」ことの重要性（一九一頁）には、さしあたり異議はない。むしろひじょうに重要だからこそ、その位置づけをはっきりさせることが大事だと思ふのである。

著者は、まえにあげたような「曲り角」の考え方から、今日

の農民運動のあり方として「農民が労働者としての立場から反独占の社会主義への運動をしなければならない」(二〇二頁)といっている。この「反独占の社会主義へ」といういい方のなかで、「反独占」ということと「社会主義へ」ということとの関連づけが問題だともうのであるが、本書ではどうもその点をはっきりしない。「反独占」＝社会主義的変革という考え方のなか、「反独占」という当面の民主主義的変革を聞いてとって、社会主義への移行の条件をつくりだし、そこから社会主義的変革を実現していくという考え方のなか、どちらかといえば、前者にちかいうようにも読みとれるが、どうなのだろうか。

じつは、この点が当面の「曲り角」のつかみ方に重要な関連があるわけで、著者のように「計画経済への曲り角」というつかみ方をするというのは、反独占＝社会主義という考え方のではないかと思うのである。だから、「計画生産」というような社会主義的な課題が、当面の反独占の運動のなかにでくることがなるのではあるまいか。

私は、日本農業の当面している「曲り角」というのは、アメリカ独占資本主義の国際的な支配にしっかりむすびつけられた戦後日本の独占資本が、経済力と軍事力の強化をめざす高度蓄積の実現のために、現在あらゆる分野ですすめている「合理化」政策の一環として、日本農業の再編成を強行している過程だと

かんがえる。^(*) こうした過程が、自由競争論や農業企業化論のさわがしい伴奏のなかで、「貿易自由化」政策をバノクにしなから、「農業構造改善」事業を中心におしすすめられていることは、それこそ本書がきわめて具体的に描きだしているところである。そして、このような独占資本と独占資本主義との「合理化」政策が、これに反対する農民のぬきさしならないさまざまな闘争を進展させることは、必然的だといえるだろう。

だが、こうした反対闘争の発展が必然だとはいっても、すくなくとも現在の段階では、事態は独占のための「合理化」の方向に曲げられていっているというのが、現実の「曲り角」のあり方であって、そうした客観的な現状の認識と自覚がなければ、反独占の運動も正しく発展できないのではないかと思う。

こういう現状のなかで、農民がもつ当面の要求は、おそらくつぎのようなものだろう。つまりそれは、本書のべているとおり、労働者が「食える賃金」を要求するように、食えるだけの農畜産物価格の引上げを要求するし、労働者が「首切り」反対をとなえるように、「構造改善」による離農の反対をとなえるものだろう。また、労働者が「完全雇傭」を要求するように、「経営改善」のための低利資金と土地拡大を要求するし、労働者が独占物価や税金の引下げを要求するように、同様の要求をするものだろう。そしてまた、合理化のデコとなるアメリカと

日本独占の「貿易自由化」政策に反対するし、軍事化政策に反対するものとなるのだろうか。

およそこうした要求は、さしあたりすべて民主的な要求である。こういう民主的な要求を組織して「反独占」の広範な運動をおしすすめる、その闘争によって「合理化」の「曲り角」をがっちりとおしとどめながら、さらに力をつよめて、この曲り角を民主的な改革に逆転させていくということが、当面の課題だということになるのではあるまいか。

そうだとすると、当面している「曲り角」は、そういう反動的労働者の独占のための「合理化」コースか、または反独占的な勤労者のための「民主化」コースか、という対立関係をよくむものというべきなのだろう。もちろん、こうした過程で、社会主義への展望を明らかにし、それに前進する準備をととのえることができるし、そうすることが必要だろうが、さしあたりはそうした見通しをもちながらも、当面の民主化コースをもっと明らかにすること、重要なものではなからうかとかんがえる。

本書では、「自由から計画への曲り角」といって、社会主義への展望を強調するあまり、みぎのような当面の民主主義的課題との関連のつかみ方が不十分であり、不明確になってしまっているように思う。この点、著者はどう考えられるだろうか。

以上、本書にたいするかなり基本的な点での私の疑問をのべてみた。著者の御教示をいただければ幸いである。

(*) こうした私の考えについては、拙稿「『農業転換』と酪農問題」(松田武雄博士定年記念出版『農業転換の経済学』昭和三十七年一月刊所収)に不十分ながらのべたので、参照していただきたい。